

## 自由と責任

宮岡 等

コーチの指導を離れて自分を中心となるチームでの練習に転じ、その後のレースで成績が振るわなかった陸上競技選手を評して「自分でプログラムを決めると、厳しく課しているつもりでも練習が甘くなる。適切なコーチの指導が必要ではないか」という意味のコメントを新聞のスポーツ欄で読んだ。四年前に発足した新医師臨床研修制度によって、医学部学生は国家試験合格後、二年間、初期研修としてさまざまな診療科で経験を積んだ後、専門を選ぶことになった。自分の専門領域以外はわからない医師を作らないために画期的な制度であるが、一方、この制度は医師自身が自分の研修を自分で決める自由を高めた。新研修制度になってから、大学とは関係ない一般病院で初期研修を行い、専門医研修も自分で選んだ病院で行う者が増えてきた。

旧制度下では多くの医学部学生は大学病院での研修を選んだ。その研修では自分が勤務したくない病院に派遣されることもあり、その勤務が大学の都合や地域への貢献のために自分が犠牲になっているのか、医師になるために本当に必要な研修の一部であるのか、と悩んだ研修医も少なくない。このような状況は若い医師に過度の負担を強いていたが、研修には有用な面もあったし、大学は所属医師が十分な臨床能力を身につけるべく教育することに責任を感じていた。

医師になるための修行の道筋を自分で決める自由度が高まったことはとても喜ばしい。しかし周囲からの課題が減ったぶん、自分に課すべき修行を厳しくしなければ実力は低下する。医師は、陸上競技選手のように自分の成績が低下するだけでなく、目の前に患者さんがいる。教育する側も受ける側も責任はさらに重大である。自由を守りながらどう研修を義務づけるか、日本の医師教育が新たな選択を迫られている。

